

指定討論コメント

鄭 潔西

原文は中国語、翻訳：陳 璐

- 1、渥美国際財団から連絡がありました。私の古巣（元所属先）である寧波大学のパブリック・ヒストリーの状況について話してほしいという依頼でした。
- 2、私は主に明代の行政公文書を解読し、文献資料に基づいた歴史研究をしている研究者です。パブリック・ヒストリー研究については素人のようなもので、実は発言権がないのですが、要望が来た為、無理矢理ながら少しばかり自分の粗雑な見解を述べさせていただきます。
- 3、寧波大学のパブリック・ヒストリー研究は、錢茂偉教授によって創始されました。錢教授は中国歴史学史の出身で、もともとは明代歴史学史を専門としており、主に古籍書物の整理、科挙史、史学著作などの関連分野の研究に従事してきました。錢教授は、その後の教育研究活動において、パブリック・ヒストリーに興味を持ち、その理論的・実践的研究を重ね、この分野で大きな成果を収めました。現在、中国国家社会科学基金の大型プロジェクト「現代中国におけるパブリック・ヒストリー記録の理論と実践に関する研究」を担当し、中国におけるパブリック・ヒストリー研究分野の代表的人物になっています。寧波大学のパブリック・ヒストリーの研究は歴史学者に限らず、学部生や大学院生も多く参加し始めたことで、「口述歴史（オーラルヒストリー）」が学生たちにとって最も力を入れている分野の一つとなってきました。参加者全員が歴史の主演となり、学部生も「太史公」（訳者注：中国前漢時代の官職。国史の編纂や暦の制定などにあたった。）となるのが、寧波大学パブリック・ヒストリー研究の重要な特徴です。
- 4、私の知る限り、「パブリック・ヒストリー」がうまくいっているケースが2つあります。一つは中国の最後の皇帝溥儀が書いた『私の前半生』で、もう一つは近代中国における二人半の外交家¹の「半」として知られている外交家顧維鈞の作品『顧維鈞回顧録』です。前者は、溥儀が東北撫順戦乱管理所で服役していた際に、自ら口述した自伝的懺悔文で、後に出版社の支援を受けて完成し、正式に出版されたものです。一方、後者の回顧録は、顧維鈞がコロンビア大学の「口述歴史プロジェクト」を受けて出来上がったハイレベルな作品です。顧維鈞本人の口述のほか、日記、会議録、書簡、電信文書などが大量に用いられ、17年がかりで編纂されたのがこの回顧録です。二人とも歴史学者ではなく、溥儀は「中国の最後の皇帝」で、顧維鈞は外交官です。後者は国内外の政治・外交の大きな出来事を数多く経験した証人でもあります。彼は「口述歴史」という方法を通して、彼らが生きた時代の歴史、人物、出来事を復元し、外部の人間にはあまり知られていなかった多くの歴史的背景や内幕を明らかにしてくれました。これは、中国近代歴史における重要な一次資料で、学界に大きな影響を与えています。しかし、この二

つの「パブリック・ヒストリー」は「口述」に限らず、他の多くの文献資料にも裏付けられており、高い厳密性を持っています。

5、私は寧波大学の「パブリック・ヒストリー」研究プロジェクトには参加しませんが、私自身はいくつかのパブリック・ヒストリー活動に参加したことがあります。歴史に接する人は、多かれ少なかれ自分の家族の歴史に興味を持っています。私もその一人で、自分の家族の歴史を掘り起こし、整理することに時間を費やしてきました。我が家はもともと世々々々読書の家で、文字記録を重視してきましたが、近代以後の戦争や1949年以降に起こったいくつかの政治運動により、その文化がほとんど断層してしまい（家財が没収され、教育権も奪われた）、文書の散逸もかなり深刻でした。現在残っているのは、私の曾祖父の祖父、叔父の詩集と文集が一冊ずしかありません。それらも偶然手に入った書物で、それ以外は参考になる家譜や簡単な伝記が多少あるぐらいです。私の曾祖父は90代まで生きたので、村や町の高齢者の多くは彼のことを知っていました。そのため、私はその人たちにインタビューし、「公衆」に「歴史学」に参加してもらったことで、曾祖父が経験した歴史の一部を取り返すことができました。このように考えると、我が家は「パブリック・ヒストリー」の受益者であるとも言えます。ただ、残念なのは、記憶には時間的制約があるため、それ以上遡るのは難しいということです。

6、私が「パブリック・ヒストリー」に接する過程でいくつかの問題も見えてきました。第一に、信憑性の問題です。周知のように、歴史学的な記述の重要な原則の一つは「真実性を徹底する」ことであり、伝統的な歴史学は歴史家に高い素質を要求するものです。それに対し、「パブリック・ヒストリー」の参加者は、伝統的な意味での歴史学者でもよいし、歴史学の素養のない素人でもよいので、レベルがバラバラな参加者が混在しています。彼らの語った「歴史」の信憑性は、その人の素養に大きく左右されます。インタビューを受けた人の中には、その人が他人に伝えたいこと、もしくは他人に伝えられることのみを語り、それ以外の情報を意識的に口から出さないようにする人もいます。また、歴史の主役としての口述者の多くは、必ずしも学問的・道徳的な良心を備えているとは限らず、思い切り誇張して語る人も多く、その歴史記述は時に常軌を逸しています。利害関係にかかわる歴史的情報の多くは、このように巧みに移植され、接ぎ木され、白黒反転されてしまいます。文化大革命の「英雄的戦士」である劉世保事件はその典型的な例です。「パブリック・ヒストリー」がこれほど盛んに行われている現在において、伝統的な歴史研究手法は依然として併用する必要があり、歴史学者が歴史客観性の原則をできる限り守るべきです。第二は、倫理に関する問題です。近年、私は1920年代から30年代にかけて浙江省にある山間部の町に住んでいた労働者グループを研究しています。このグループは日本への出稼ぎしていた人たちで、合計200人余りいます。全員がもう生きていません。現在、最も包括的な資料は1984年に行われた全県の華僑インタビューの記録のみです。私はその資料に基づき、多くの地元の人々にインタビュー

したところ、日本へ出稼ぎしたこの労働者たちが1930年代に多くの日本人女性を連れて山に帰ってきたという特殊な現象を発見することができました。この地元の人たちは、最近徐州で起きた女性人身売買事件のように、彼女たちを「誘拐」されて来た人だと考えています。さらに追跡調査をしたおかげで、この日本人女性たちの中の一人の孫娘と連絡が取れました。この孫娘は現在日本に住んでおり、彼女によると、祖母は20代頃中国に来ており、浙江省の山中で40年間暮らし、二人の山人と結婚しました。1977年の中日国交正常化後帰国できるようになり、子供や孫たちを日本に連れて帰り、日本でさらに30年近く暮らし、十数年前に百歳近くで他界しました。孫娘の回想によると、祖母は頭脳明晰で素養も非常に高かったが、自分の過去については何も語らず、家族も祖母の若い頃のことについてはほとんど知りません。1984年のインタビュー記録にも彼女に関する情報は見つかりません。このケースに参加できる「公衆」は少なくありませんが、得られる情報は比較的少ないのです。根本的な原因は、この女性の「公の歴史」に参加する意欲が非常に低いことにあります。無論、中日両国の文書を調べたり、関係者をインタビューしたりして、この日本人女性の過去をできるだけ復元することはできますが、このように歴史を掘り起こして公開する行為は、彼女およびその家族にとって何らかの形で害を及ぼす可能性があるため、事前に倫理的配慮が必要です。第三の問題は、研究価値の問題です。私はインタビューする際に、学歴が低く、話の論理性に欠け、人生のストーリーも代表的ではない人たちに会ったこともあります。その場合、インタビューから得られる物は、大体「日の出とともに起きて日の入りに帰る」、「山に寺があり、寺に老僧がいる」といった千編一律の日常生活しかありません。こうした内容は非常にリアルですが、あまり意味がなく、たとえインタビュー回数や情報が増えなくても、歴史的な価値に欠けています。「パブリック・ヒストリー」研究の発展によって、歴史研究の対象が広がり、「太史公」役を担っている人やグループに対する要求も下げられたとはいえ、研究の価値という点において、我々は基本的な追求を徹底すべきであり、できる限り代表的で独自性のある質の高い歴史研究成果を作り、低レベル歴史記述のゴミの繰り返しや増加生産を避ける必要があります。

7、最後に、少し現実的なことについて話します。歴史学は伝統的な学問であるため、中国で廃止される確率はそれほど高くありませんが、相対的に冷遇されているため、現在の飽和度が高く、就職の見通しは理想的とは言えません。博士号取得者であっても、望ましい仕事を見つけることは困難です。大学によって、歴史学専攻の学生募集数を減らしたり、歴史学の基礎理論を学ぶカリキュラムを短くしたりすることがあるため、歴史学の卒業生が歴史的知識に乏しいという奇妙な現象が起きています。疫病が勃発した後、歴史学専攻の就職率は低下傾向にあり、私のところで卒業した大学院生を例にして見ると、今年の卒業生22名のうち、2名が博士課程に合格したほか、残りの半分の人が就職先未定です。彼らは中学校・高校の歴史の教員や国家公務員や公的事業部門を目指

しています。なぜなら、これらの機関は政府によって財政的に支援され、経済的に安定しているからです。一方、コロナ禍以来、他の仕事はこうした保障が難しい状況にあります。現在の若者たち全員が上記の体制に入ることを望んでおり、歴史学の学生（学部生、修士と博士）も例外ではありません。この状況は現在の中国にある社会問題を反映しているように思います。

i （訳者注）中国の外交官では、周恩来、李鴻章のほか、顧維鈞がよく知られているが、顧維鈞は決定権を持たなかったため、通説では半分の外交官と評価され、周恩来と李鴻章と共に、近代中国二人半の外交家と呼ばれている。